礫川（レキセン）新刊案内

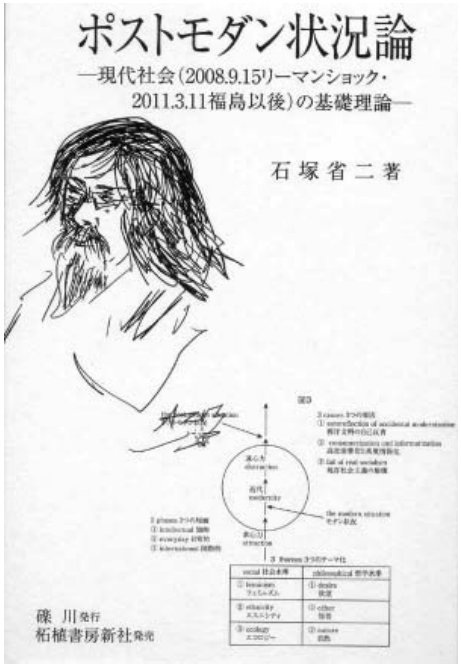
東京都江戸川区船堀四―四―一〇―一〇―一二
〒〇三―六六六三―八八五一　ＦＡＸ〇三―六六六三―八八五二

ポストモダン状況論

―現代社会（2008. 9. 15 リーマンショック・2011. 3. 11 福島以後）の基礎理論―

石塚省二著

四六判上製／232頁／定価 2000 円＋税



命を一瞬にして失った人々にとって、既に述べた非原理の所有をことごとく奪い去られた人々にとって現代社会は何を与えてくれるのであろうか。所有や領土といった概念の非原理性を自覚されるものである。しかも、人間が自然を征服し、制御するという近代社会に至る理想は、その根底からくずれ去ったのである。

「人類が自然を征服し、制御する利鋼」は、それ自体のうちに非原理性（所有や領土概念の無根拠性）をはらんでいたことを白日の下にさらけ出したと言うことができよう。

私が、とりわけ一九九一年以来、現存社会主義が欲望独裁体制として近代社会そのものを生み出してきた地域、ヨーロッパの真っ只中で崩壊して以来、理論化してきた、本書はそれらの論集という性格をもつのであるが、「ポストモダン状況論」の現実的な新たな局面がフクシマ（福島）問題として、ヨーロッパ化、即ち近代化を百五十年以上に亘ってしゃにむに進めてきた国家のまさにその領土のうちで展開することになったのである。三・一一フクシマが世界化し、世界史的意義をもつゆえんなのである。

マルクスは、その一八四四年のパリ手稿で、「私的所有＝どろぼう」と記していた。ローマ帝国の存立基盤でもあった、被征服民の奴隷所有にはじまり、封建時代の土地所有にしても、「これは俺（達）のものだ」、「これは私（達）のものだ」という宣言と、その権力的、すなわち力を用いた「所有」防衛がともなわなければ、所有は所有として社会的に存立し得なかったのである。資本主義経済の時代になってもその事情は基本的に変わらないと言うのである。所有を原理的に、即ちそれ自体から根拠付けることはできないのである。

今日では常識化している、所有の主体が国家とされる、領土についても同様である。マルクスの言う「必然の王国」の底には原理化できないもの、「非原理」が沈んでいるのである。「必然の王国」から「自由の王国」への移行は果たして可能なのか。

非原理的なもの、即ち上述した「所有」からの解放（自由）が促進されるのか。ルカーチは、その晩年の大著『社会的存在の存在論』の中で、マルクスの主張「所有が存在を規定している」疎外状況を前面に出している。非原理が原理を規定してしまっていると言うのである。イデオロギーと疎外の問題項が右の存在論の最も重要な問題複合体（複雑性）として、「労働」と「再生産」につづいて論じられているのである。

（本書「序章」より）

目　次

序　章　現存資本主義の崩壊と福島以後の社会を
　グローバルに論じる
第一章　六八年パリ五月革命の社会学
第二章　現存社会主義の崩壊と二十世紀末思想のゆくえ
第三章　二つのマルコ・ポーロ
第四章　大学への社会哲学的考察
第五章　三つの「ポストモダン状況」と「ソフィーの世界」
第六章　グローバル化時代における社会哲学の想像力
終　章　3. 11 フクシマ以後の現代社会の基礎理論